軽井沢シンフォニックコーラス
TUTTI 第５６号
2025.07.25

今号は、過日のフォレストコンサートの感想などを収めた『フォレコン特集号』です

演奏会を終えて

寺田 和歌子

この度の大賀ホールでの演奏会を終えて、心から充実感と感謝の気持ちでいっぱいです。武満徹の『小さな空』、宮沢賢治の『星めぐりのうた』、最後に『冬の星座』を誰に邪魔されることなく１番に歌えて、シンフォのカラーが会場いっぱいに表現できたと思います。リハーサルまでの緊張感を乗り越え、本番では今までで最高の演奏ができたと実感しています。
私は当初からアカペラでの演奏に揺るぎない信念を持ち、ピアニストから伴奏の提案をいただいた際も、団員の皆さんの力を信じてお断りしました。演奏会直前には不安の声も聞こえましたが、本番での皆さんの集中力と表現力は私の信頼を見事に証明してくれました。

今回は音楽を共に創り上げる一体感を、練習ではもちろん、ステージでも味わえたことが最大の収穫でした。皆さんの真摯な姿勢と献身的な努力に心から感謝しています。

この貴重な経験を胸に、来年の武満徹『死んだ男の残したものは』に向けて、さらに深い表現を追求していきましょう。しばらくは、ピアノなしでもう一度武満さんに向き合いましょう。お互いの響きを大切に、より高みを目指して共に歩んでいけることを心から楽しみにしています。

2025 フォレストコンサートに参加して

伊藤 綽子（ アルト ）

皆様、フォレストコンサート出演、お疲れ様でした。
今年度は出演が第１番目だったため、リハーサルから少々緊張気味にスタートしました。

第１曲目の「小さな空」は武満徹（詩・曲）のピアノ伴奏なしの曲です。武満が幼い頃、家の近くにキリスト教の教会があり、屋根には十字架、窓には美しいステンドグラスが貼ってあり、２階の窓からそれを見て育ったこと。腕白な子どもで、お母さんによく叱られて泣いたこと。美しくて、暖かくて、優しさに包まれた子ども時代を繊細なメロディーで綴っています。
第２曲は「星めぐりのうた」でした。作曲もする童話作家である宮沢賢治の曲です。符点８分音符に 16 分音符が弾むように私達を星空に誘います。お母さんが幼児に歌ってあげている情景が思い浮かびます。
第３曲は子供の頃からよく知っている「冬の星座」でした。堀内敬三作詞・ヘイズ作曲・若林千春編曲で、初めて見る”手書き（高音部の補助線はどこまでも加えられて、一体何の音か分からない状態の）“の楽譜です。合唱部分は主旋律がソプラノからテナーに移ったり、またアルトへ、バスへと華やかなピアノ伴奏に導かれて移っていきます。最後は４声が歌いあげます。・・・冬の満天の美しい星たちと共に。

お客様にはどのように届いたでしょうか・・・。
少々心配でしたが、私達は満足してステージを降りました。

2025 年フォレストコンサートを振り返って　安光 榮子（ ソプラノ ）

今年のフォレストコンサートも終わってみれば、本番はまとまっていたように思いますし、練習時より格段に出来が良く、ステージから退場する時は安堵の笑みがこぼれました。一番心配された「小さな空」が山内さんによれば一番良くて、「冬の星座」は各パートがバラバラで良くなかったとのことでしたが、どういう状態が一番あの曲にとって良いのか、考えたりしました。他のパートの声を聴くということでしょうか。それは私のこれからの改善点です。
私の友人からの今年のコメントは「難しい曲なのにソプラノの声がよく通って、男性の声も良かったね。いい音楽を聴けてありがとうございました♬」とのことでした。（テヘ、すみません、友人なので。）
お隣のお家のおば様はホールで会うと、私の手を取って満面の笑みで「よかったあ！」と言ってくれました。私もほっとして嬉しくなりました。
もう、かれこれ長い間、数多く大賀ホールのステージに立って来ました。今年は以前よりホールが狭く感じられました。これはいいことなのかなとか自分で勝手に思っています。家族からは目が悪くなったんじゃない？とか言われましたが。視力は確かに以前より落ちていますがね。昨年はハイチェアに座って歌いましたが、今年は立っ

て歌えました。イケメンの理学療法士さんに感謝かなあ、ハハハ。リハビリは卒業したので寂しい限りです。
皆様、お身体を大切にして一日でも長く共に歌って参りましょう。これからもよろしくお願いいたします。

地球に生きる喜び

小松 春美（ ソプラノ ）

２０２５年のフォレストコンサートは、出場した８団体の最初が軽井沢シンフォニックコーラスでした。物事の始まりはドキドキ感とワクワクする期待とに満ちており、緊張するも喜びでいっぱいでした。そんな私はステージ裏で出番を待ちながら水を一口飲むと、弱点の気管支炎に障り咳き込んでしまいました。皆さんにご迷惑をおかけしてはいけないと焦っていると、舞台裏のビデオに一人の姿が映し出され、夫であることにビックリ！　皆の心配を他所に堂々と舞台袖から出て、戻ってきました。後に聞いた友人夫妻からの感想では「ステージの確認をされたのでしょ」との事。本人も、後ろを見たら誰も来ないので、慌てずしっかりした足取りで戻ったのだそうです。とんだハプニングでしたが、その後は順調に進行されました。

最初の曲『小さな空』は作詞・作曲が武満徹。彼の作品は前衛的なものが多いのに、この曲は繊細であたたかい歌詞です。無伴奏で合唱すると、一人ひとりの声が大賀ホールに響いて、幼い頃を思い起こし胸が熱くなりました。
次の宮澤賢治・作『星めぐりのうた』を歌うと、子供のころに読んだ「銀河鉄道の夜」を思い出しました。主人公ジョバンニの旅が、心の成長と孤独の克服と、親友カムパネルラとの別れで本当の幸せを見出し、牛乳を手に母親のもとへ歩き出す姿…。私は『星めぐりのうた』で星をめぐると、己の過去を思い起こします。
最後の『冬の星座』は、小学校唱歌で歌いました。後期高齢の今、寺田先生の指揮で歌い、清水先生の美しい伴奏が独自の世界観を与えておられ、そのハーモニーがたまらなく豊かに感じられました。そして特にこの年齢になって感銘を受けたのは「くすしき光」です。単なる光ではなく、不思議な力や、神秘的な光景、あるいは超自然的な現象を暗示するとの事。「無窮」もそうですが、歌詞に深みと神秘性を与えており、日本語の美しさを如実に感じます。

今年は「空」をテーマにした３曲で、それぞれ独自の世界観があり、それを以って歌いました。独り練習をしながら夜空を見上げ、この地球に生きる喜びを歌唱できるのは感動と、心からの感謝です。

空は見えなかった

岡田 弥生（ アルト ）

去年の大賀ホールでは「宿場さんざめき」で浅間へ向かう地蔵ヶ原の光景を体感できた喜びにひたったので、今年は「どんな空が見えるかな」と楽しみにしていたのですが、なんたること、空どころか、客席のキャベツも、なーんにも見えませんでした。15 分間の記憶さえもあやふやです。
ひどく緊張していたせいだろうと思います。大賀ホールに来てくれた友人からは「ものすごく怖い顔してた」と言われました。緊張して集中することは悪いことではないですが、歌を楽しむ気持ちが行方不明になってしまうようでは、とほほ、です。
毎朝犬の散歩をしながら空を眺めるのが楽しみだし、夕日を受けたステンドグラスが輝いていた光景を見たこともあるし、夜空の星を眺めるのも大好きなのに、そして大賀ホールの落葉松の響きを感じたかったのに、ガチガチに緊張して扉を閉ざしてしまったのが無念です。
７月初めの万咲で、「小さな空」の一部を歌った時は、楽しかったなあ。楽譜を持たずに歌ったのは初めてでした。いつもとは並び方も違うし全体の声がよく聞こえたわけではなかったけれど、合唱っていいなあ、とあらためて感じました。大賀ホールではなくて万咲で、というのが残念。
緊張していてもしっかり聴いて、わくわくしながら歌う、そういう人に私はなりたい。

ますますの御発展を

村野　穏（ 元アルト ）

平成１７年５月（2005 年）大賀ホール柿落しを機に発足されたシンフォニックコーラス。途中、今とは違う名前の時もありましたが、現在の名前に落ち着きました。その頃、和佳子先生、まだ学生だったそうで、和佳子先生のお母さん（泉先生）に御指導いただきました。
この先生、何と体育の先生だったと聴いています。きっとスポーツにも、たけていらっしゃったのでは？
性格も明るく、声にも張りがあり、和佳子先生もその気質を継いでいらっしゃる気がいたします。
美しい村の組曲中、3 曲目「浅間山噴火」を「大爆発、々々々」と仰っていたのを今でも思い出します。
先生、練習にも熱心で、私達団員もついてゆくのに一生懸命でした。泉先生、さぞかし大変だったと思います。

先日も申しましたが、和佳子先生の指揮し乍ら踊り出されるのも、そのルーツかもしれません。
皆さん、練習を重ねられ、9 月にみえる柳沢先生（ピアノ）にも、びっくりしていただこうじゃありませんか！
両先生の指導のもと、今後、増々の御発展をお祈りいたします。
だって本番に強いシンフォニックですもの、どんと来いって感じです。　終り。

雑感

村井 佳彦（ バ ス ）

たまたま YouTube でパート音源を見つけて、散歩や通勤で聞いていたら、思いのほか頭に入った。暗譜できて良かったのは練習から指揮者に集中できること。
反省は譜面での確認がおろそかになってしまったこと。そのため 不安な個所が残ってしまった。なるべく早く暗譜をした上で譜読みを繰り返そう。

発声その他諸々について悩みが続いている。日常で声が響くときとそうでないときがある。何が違うか、合唱にはどちらがあっているのか知りたい。自由に制御できればいいな。

音程について、出す音、自分で聞く音、他の方の音、あっているはずなのに、感覚的にズレているように聞こえる。音色のせいなのかよくわからない。
全音の違いはどの音程でも同じはずなのに、場所によって音符の距離に違いを感じるのはなぜだろう。
一方、練習の録音を聞くと、最初の音が低めからずり上がったり、長音が上ずったりに聞こえ（とっても音痴）愕然とすることがある。細やかさが足りないと思う。

リズム感はあると思っているが、最後の拍への丁寧さが足りないことを痛感している。しかし丁寧すぎると遅れてしまう。声が音になるまでの遅れも多い。子音がジャストタイムで出せてすぐに母音に移れるようになりたい。

顔をはじめ声を出す機関としての体の使い方に興味を持ちはじめた。日常的に意識を続けなければとおもう。

以前から思っていることだが、曲に向かったときに生じるいろんな感情がなぜ起きて来るのか、その理由を譜面から拾えるようになりたい。

その瞬間（とき） 強く想ったこと

白枝 庸介（ バ ス ）

玄関から 55 歩、桜並木を真直ぐ 141 歩、敷地に入って 43 歩で楽屋入り口。そこから通路でステージドアまでの計 269 歩 約 160 ㍍の距離に丸二年を要してしまいましたが、お蔭さまでやっと ステージ･デビュー を果たせました。ありがとうございました。

ステージドアが開いた瞬間から降壇するまでの間、不思議なほど
　客席のキャベツがよく見え、
　　一人の演者であると意識でき、
　　　ホール全体を自分のものと感じ、
　　　　声をコントロールできたように感じました。
そして、やり直しができない「一回性」の心地良い緊張感を味わえました。

最後に全体合唱で皆さんと歌いながら、ここで『軽井沢組曲 第１４曲・美しい村』を歌えたら、どんなにか素晴らしいだろう！ と。

掛け持ち出演での苦労話

依田　功（ テノール ）

コーラスでは現在、こちら「軽井沢シンフォニックコーラス」と「軽井沢混声合唱団」「軽井沢童謡唱歌を歌う会」の３つに所属しています。またその他に歌関係では「追分節保存会」や期間限定の「ともだち合唱団」、大賀ホールオープンを記念しての「第九を歌う会」などにも参加しました。これだけやっているとなかなかたいへんで、仕事をしている時はさすがに出来なくなり、いくつかを休ませていただいた時もありました。

２つのコーラスに絞って話をさせていただきますと、シンフォニックでは「美しい村」、軽井沢混声ではオペラ「メリー・ウィドウ」のそれぞれの初回公演の開催に携わらせていただいたことはとてもラッキーでした。２つの公演は、どちらも最高に感動的なもので、忙しくはありましたが、２つのおいしいところをたっぷり味わわせていただき、自分は何て幸せ者なのだろうと思ったりしたところです。今また、「美しい村」公演の話が進んでいますが、新しい感動を楽しみに、大イベントにはなりますがみんなで力を合わせて頑張っていけたらと思います。

苦労話で言いますと、２つやっているのはやはり忙しいです。軽井沢混声ではオペ

ラをやるので練習量も相当なものになり、発表前の１～２か月は特に気合が入ってきます。オペラは発声とかの面でもとても勉強になり、「何としても通る大きな声を出そう」と工夫しながら努力することで、声量が増してくるような気がします。また、コーラスなどでも言えることですが、びっくりするようないいメロディーに出会うことがあり、これもやっているからこそ味わせる感動かなと思います。

そんな掛け持ちの中で助かるのは、歌うパートの音源をいただくことです。先日歌った「小さな空」などでも、音源を送っていただきとても助かりました。音源があると自主練習が効果的に出来るので、短時間で覚えられ負担が少なくなります。自分でピアノが弾ければ音取りが出来るのですが、間の取り方が難しかったり、今ひとつうまくいきません。いよいよ覚えられない時は、ピアノの先生にパートを弾いていただいて録音し覚えたりしています。今度やる「死んだ男の残したものは」でも音源があると助かります。あの曲もそれぞれのパートが複雑に絡み合い、バッチリ決まれば格好いいと思うので頑張りたいです。

そしてもうひとつ頑張りたいのが実はフォークソングなのです。1970 年代フォークブームの後半で若い時代を過ごした自分にとっては、やはりあの頃流行った「かぐやひめ」「井上陽水」「吉田拓郎」「さだまさし」等々の当時「ニューミュージック」と呼ばれたものをやりたいのです。今もライブは年４～５回ほどやっており、主にオリジナルを歌って楽しませていただいております。何と言っても自分の曲を思い切り歌うのはいいものですし、多少間違えても誰にも分かりません。最近新曲はあまり出来ていませんが、このごろまた作りたいなと思ったりしています。歌関係をはじめ、その他にもやりたい事、やらなければならない事が山ほどあり忙しいところですが、家族やまわりの皆さまにご迷惑をかけないよう気をつけながら、日々元気よく活動していきたいと思っております。お世話になりますがよろしくお願いいたします。

「2026 フォレストコンサートに向けて」　大林 義博（ 団長・テノール ）

「軽井沢緑の音楽祭」の名称を「軽井沢フォレストコンサート」に変えて 2 回目を 6 月 15 日に開催、当日は朝 9 時からタイムテーブルに沿ってステージリハからラウンジリハ、そして本番のステージは最初、という条件のもと、指揮者の寺田先生、ピアノの柳沢先生、清水先生の指導により日ごろの練習の成果が発揮されたコンサートになったと思います。

参加 8 団体中、混声は 3 団体で、当団はバスが 5 名と一番多く、その厚いベースの

上にアルト、テノール、ソプラノと素晴らしいハーモニーを聞くことができたと評価されました。

7 月 19 日、9 回目の実行委員会の反省会では、2 時間にわたって多くの意見が出ました。詳細については後日報告致しますが、入場者数は昨年より 60 名多い 320 名でした。

2026 フォレストコンサート（来年 6 月 14 日）に向けて 10 月 11 日実行委員会が開かれます。多くの意見や提案をお待ちしています。

【編集後記】

皆様にしつこく懇願を続けたおかげで「フォレコン特集号」ができあがりました。御寄稿くださった皆様、ありがとうございました。十人十色と言いますけど、同じ時空を過ごしても、ほんとうに人それぞれなんですね。こんなふうに色とりどりの個性が集まったのも、ただひとつ、一緒に歌を歌うため。これからも元気で、楽しく歌っていきましょう（ 岡田 ）

7/19 実行委員会にて軽井沢組曲歌唱を提案のうえ初演 CD＋歌詞パンフを各コーラス代表出席者に 4 組お預けしました。①山鳩⇒コーロ(大林さん)、②ハーモニー⇒混成(依田さん)、③借宿⇒チェンバー(寺田先生)、④ゴスペル⇒軽女(遠山美枝子さん)。年末頃には試聴･回覧が終わって（)様に戻りますので、白枝までご回付のほどお願いいたします（ 白枝 ）